

小説

女性
実業家・
広岡浅子の
生涯

堀江佐川

furukawa chieko

古川智映子



堀川土佐

潮出版社

著者略歴

本名・古川ぬい。昭和7(1932)年、青森県弘前市生まれ。
東京女子大学文学部日本文学科卒。文部省直轄国立国語
研究所、都内私立高校教諭を経て執筆生活に入る。

小説	土佐堀川
女性実業家・広岡浅子の生涯	
一九八八年九月二〇日	印刷
一九八八年一〇月五日	発行
著者	古川智映子
発行者	株式会社潮出版社
東京都千代田区飯田橋三―一三	
郵便番号	一〇二
電話(販売部)	03―二三〇―〇七四一
(編集部)	03―二三〇―一四六八
振替	東京五―六一〇九〇
印刷	明和印刷
付物印刷	栗田印刷
製本	東京美術紙工
定価	一二〇〇円

©Chieko Furukawa, Printed in Japan. 1988

乱丁・落丁本はお取替いたします。販売窓口あて
御郵送下さい。本書の内容の一部あるいは全部を無
断で複写複製(コピー)することは、法律で認められ
た場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害と
なりますので、その場合には予め小社あて許諾を求
めて下さい。

ISBN4-267-01194-X C0093

小説 土佐堀川 ● 目次

日照り 7

女商の系譜 19

銀目廃止 32

寒空 56

芽生え 77

虎口をのがれて 93

鉾山炎上 110

加島銀行発足 129

堂々たる女性実業家 147

成瀬仁蔵との邂逅 157

日本女子大学校創立へ 178

春の嵐 191

大同生命誕生 209

不死鳥のように 224

連翹花咲く 236

「加島屋ばんざい」 250

裝幀 菊地信義

小説
土佐堀川——女性実業家・広岡浅子の生涯

日照り

7 日照り

浅子は加島屋を出て少ししてから、渡辺橋の袂で駕籠を乗り捨てた。
堂島川が目映い陽光を映して煌いている。暦の上ではもう秋だというのに、大阪は相変わらずの暑さであった。

「ここから帰っておくれやす」

「そやかて、若御寮はんのことは間違いないようにて、ご隠居はんからくれぐれも言われてますよつてに」

番頭も女中も、帰るようという浅子の言いつけに素直に従おうとしない。

「小藤がひとり残るだけでええのや。三人ともついてくるのは人手の無駄やわ。うちが帰るまでに、仕事片づけてもろたほうがどない得か」

浅子は後もふり返らずに歩き出した。

とにかく暑い。顔中に汗の粒が噴き上げてくる。着ている振袖の下も汗びっしりで、肌着などはもう絞れるほどになっている。

これだから加島屋は困る、浅子は内心そう思っていた。京都の豪商油小路三井家から嫁に来て、すぐに浅子は加島屋の内情を見てとった。早晚、加島屋の店は立ちゆかなくなるであろう。商い

はすべて番頭任せ、使用人ものんびりしているし、何につけても無駄が多すぎる。

夫の信五郎は、謡曲だ茶の湯だと毎日趣味三昧の生活で出歩いている。もし商いが、自分の代に不振になるようなことにでもなれば、と思うと、浅子はじつとしてはいられない気持ちになる。「お姑はん、きようは昼前、堂島の米市場見学に行つて来ます」

朝飯の後、浅子は姑のよねにそう言つて許しを得た。

「行つておいでやす。番頭はんと女中をつけてあげまひよ。加島屋の若御寮はんはきれいやて、えらい評判や。ええ着物を着てお行きやす。ほれ、あの水辺に螢の飛んでる緞の振袖がええわ」姑は真面目な顔でそう答えた。

土佐堀川にかかっている肥後橋前の加島屋から、堂島まではほんの目と鼻の先である。しかも威勢のいい男衆が集まつて米の競り売りをする場所に、振袖を着て出かけるようにと言うのである。何一つ不自由も知らず、豪福な夫の庇護を受けて暮らしてきたよねの言動には、常軌を逸したところがある。

「ふだん着のままではあかんのどっしゃるか」

「ええ着物を着て、駕籠で行きなはれ」

よねはそう言つて浅子に背を向けた。浅子は着替え始めた。それが加島屋の家風であれば、仕方がないという気持ちであつた。よねにしてみれば、別に悪意があるわけではなく、自慢の息子の嫁を着飾つてみせたいだけなのである。

これではまるで大名の奥方様のお出かけのようだと思い、浅子は肩を竦めた。

事実この頃では、財力を失つた大名の家老たちが、両替商の座敷で両手をつき平身低頭してい

る姿が見られる。それほど各藩は金に詰まり、両替商からの借金を重ねている。財を積み力を得た商人が、まさに武士を凌しのぐとしてゐる時代であつた。

浅子は橋きしの際から番頭と女中を返す時に、用事を足して帰るように命じた。無駄歩きはさせない。商人はこうしたことにも徹している。

小藤と二人きりになると、浅子は歩を速めた。小藤は実家の三井にゐる腰元の中で、一番の浅子のお気に入りであつた。無口で誠実によく仕える。浅子は沢山ゐる女中の中から小藤を選んで連れ、加島屋に嫁入つたのである。

「すぐ近くに行くというのに、こない面倒なことでは先が思いやられるなあ、小藤」

「へえ」

とにかく長い袖が邪魔になつて仕方がない。浅子は外股でのつしのつしと歩いた。襦しつけの厳しい三井家で、どんなに礼儀作法を教え込まれてもこれだけは直すことができなかった。というよりも、初めから浅子には直す気がなかった。万事が大ざっぱで面倒くさいことが大嫌い、それが浅子の性分である。

足もとに絡みついてくる振袖を、浅子はぐるぐると二、三度腕に巻きつけてから、肩に担いだ。二の腕が露あらわに見え、着物の裾も開いている。

加島屋の若御寮さんらしくない粗野そやな振る舞いに、小藤はさつきからはらはらしている。三井を出る時、浅子の嫂あねいめに厳しく言い含められていたのである。豪商三井の娘として恥ずかしい振る舞いのないように、くれぐれも粗暴な行動のないように、利和は小藤にいくどもそう繰り返した。

いま三井高喜の妻の利和がこの恰好を見たら、どう思うであろうか。そう考えただけでも小藤は胸が痛くなってくる。

「若御寮はん、あの」

呼びかけようとしても、背の低い小藤は浅子に遥かに遅れてしまい、ついていくのが精一杯なのである。その上、浅子の頭上に日傘を差しかけているので、背伸びをして走らねばならない。日傘は、どんどん先に行ってしまう浅子の役には立たないのに、それでも小藤は忠実に差しかけることをやめない。

この珍妙な組み合わせは、行きあう通行者の人目を惹き、ほとんどの人が立ち止まって二人をふり返った。

道の角で、ようやく浅子は立ち止まった。

「小藤、早うおいで。ほんまに暑うてかなわんなあ。こんな時にこの恰好ではなあ」

「加島屋様は、浪花一の両替商でいいです。ちよっと出かけるのにもお振袖とはなあ。格式の高いお家柄やし、淀川の水が涸れても加島屋様の身代は潰れることはないですよってに」

同じ豪商というのに、加島屋と浅子の生まれた三井とではずいぶん差があった。浅子の父の高喜は亡くなって、他家から養子に入った高喜が後を継いでいるが、三井家ではうわべよりも中身を大切に考える。特に浅子の義兄の高喜は、合理的な考えの持ち主で、時代の動きを敏感にとらえようとする。

「加島屋は、小藤が考えてるように豪福ではないのや。いま蔵の中は空き蔵も同然や」
「なんでどっしやろ」

「以前に大名に貸し付けてあつた金銀を一度回収して、蔵は千両箱でいっぱいになったそうや。それを寝かしておくのはもったいないいうて、また貸し付けてしもた」

「両替商がお金貸すのは当たり前やと思いますか」

小藤はそれ以上には考えが至らない。浅子は別の見方で、ある不安を抱いているのである。

道の角を曲がつてまた歩き始めた。堂島川に沿つて、多くの米蔵が並んでいる。二人は、蔵の間の日陰に入つて少し休んだ。この辺は川幅も広く、流れがゆったりとしている。雄大な眺めに接し、浅子は気が晴れるように思つた。

小藤の頭からは、くれぐれも粗相そそうのないようにと言つた利和の言葉が離れない。このありさまを見て、血相を変える利和の顔が見えるような気がする。

「きょうは暑さが格別どす。このへんでお歸りになつたらどないどつしやるか」

一刻も早く加島屋に連れ戻したほうがいい。小藤はそう判断した。

浅子は立ち止まつて袂を口に当てた。ほんのわずかだったが川から吹き上げてくる風に当たつたせい、咳が出た。

「大丈夫どすか、若御寮はん」

「たいしたことはない。加島屋へ来る前にもちよつと咳が出たんや。嫁入りの支度などで、疲れたせいやろ」

浅子は、また少し咳き込んだ。

「どけどけ、邪魔や。こんなとこに女が来て何しとるのや。シッ」

荷揚げ人夫が犬にでもするように、二人を追ひ払おうとした。

「うちらを何やと思うてる。失礼な奴ぢや」

浅子は仁王立ちになり眼を剝いて睨みつけた。こんな時、浅子の目は大きなぎよる目になる。見事に圧されたのか、担いでいた米俵を大きくゆすり上げて人夫は米蔵の中に消えた。

「若御寮はん、なにとぞそのお袖を」

「小藤、後からゆつくりおいで。何ならここから帰つてもええのや」

振袖を肩から下ろさせようとするのだが、浅子には聞こえないようである。喧しいことを言う、逆に自分が先に返されてしまいそうになる。置きざりにされまいと、小藤は懸命に浅子の後を追った。

さすがに大阪は全国からの品物の集散地であつて、米だけではなく他の産物のための蔵も多い。薩摩の砂糖、土佐、長門、岩見の紙、阿波の藍、備後の畳表、土佐の鯉節、播磨や周防の塩、肥後、伊予の臘などが、蔵物として収納されている。

これらは蔵元の商人を通して売買され、その代金は掛屋に預けられる。掛屋は両替屋と米屋兼業のことが多く、加島屋でも米方両替のほうも扱っていた。

こうした蔵物を管理する諸藩の蔵屋敷が、中之島や土佐堀川、江戸堀川の沿岸に数多く見受けられる。明暦の頃には二十五ぐらいしかなかったのが、いまは百五十ほどにふえていた。

浅子は渡辺橋から田蓑橋の横を通り、玉江橋の方角へ歩いた。川の景色を眺めて歩き、踵を返していま来たばかりの道を戻った。

米市が立つのは、渡辺橋から大江橋一帯にかけてである。昔、豪商淀屋が米の蔵元をしていたのだが、その近くの北浜あたりに米相場が立っていた。淀屋は儲けた金で贅の限りを尽くし、禁

制の白無垢しろむくおんし恩賜の紋服を着て廊へ出入りをした。これが藩主の怒りに触れ、その結果は財産没収けつしよ關所かんしよとり潰しとなったのである。その後、米市は北浜から堂島新地へ移動している。

「ぎょうさんな人どすなあ」

小藤は上背がないので、人垣の中に隠れて見えなくなつてしまひそうである。

市場では多くの男たちが、両手や片手を上げ、小指で数を表わしては叫んでいる。

「小藤、どこにいる。はぐれたらあかんで」

浅子は爪先つまさきで立ち、小藤の姿を探して手を繋つないだ。

「若御寮はん、あれは何どつしやるか」

取引所前の家の屋根に高い櫓やぐらが組まれ、ひとりの男が上がっている。盛んに白い旗を振つていた。

見ているうちに黒い旗に変わった。

「黒と白、まるでお葬式のようにどすなあ」

「なに阿呆なこと言うてるの。小藤、あれは相場の合図をしてるのや」

「あれが相場ですか」

「江戸も京都も大津も、ずっと南の下関いうところ、みなこの堂島の米相場をもとにして動いてるんや。ちよつとでも早う知らせなあかん。堂島で米の値が上がつてるのに、よそで安う売つたら仲買人が損をする。相場の値段は飛脚とばせて知らせてる。けど天氣のええ日には、あないして高い場所ばしで旗振つて、次々に伝えていくということや」

「へえ、これは驚きました」

「旗の信号は三里四方まで届くのやて。三里ごとに旗の中継所こさえて目的地に伝えるんや。夜は暗うて見えん。そこで旗の代わりに提灯を使うのや」

「えらいことどすなあ」

小藤は感心してばかりいる。

信号は、旗の色と振り方のふた通りを組み合わせることによつて、幾種類にもなる。

「雨が降つたら無理やおへんか」

「ええこと訊いてくれた。雨の日には鳩を使うて伝書するんや」

「鳩て、あの鳥の。どないなことですのやろ」

「鳩はどこからでも自分の巢に帰るいう本能を持つとる。それを利用して、足に文結ふみゆわいつけて伝書するのや」

若御寮はんは、いつの間にこのような知識を蓄えたのかと、小藤は不思議で仕方がない。

「ええ勉強になりました。うちもちよつと賢うなつたような気がします」

小藤はもつとよく見たいと思ひ、浅子に手を握られたままで背伸びをした。

「どうや小藤、えらい活気やろ。商いは面白いなあ。値をひとつきめるにもこないにぎょうさんの人が競い合う。商人は数に強うならんとあかん。女やからいうて、計算もでけんようでは遅れちゃうわ」

これからは女も数に無関心でいてはならない。浅子はずっと前からそう考えていた。

「そんなとこに突つ立って邪魔や、どけ」

仲買人がひどい形相で怒鳴り散らした。競り市は殺氣立っている。